自己卑下的自己提示戦略に関する日米比較研究： 文化的信念とエラーマネージメント

○ 橋本 博文

(北海道大学大学院文学研究科, 日本学術振興会特別研究員 DC)

キーワード: 文化的信念, 自己卑下, エラーマネージメント

A comparison of self-effacement strategies in the US and Japan: Cultural beliefs and the logic of error management

Hirofumi HASHIMOTO

(Graduate School of Letters, Hokkaido University, The Japan Society for the Promotion of Science research fellow DC)

Key words: cultural beliefs, self-effacing, error management

目 的

日本人に特有とされる自己卑下的な自己提示は、集団主義的社会を生きる人々に“デフォルト”で採用されるエラーマネージメント戦略として解釈可能である(橋本・山岸, 2008; 鈴木・山岸, 2004)。本研究の目的は、このエラーマネージメント戦略の背後にあると考えられる文化的信念の差異に着目することにより、上述の解釈を一步進めることにある。山岸ら(Yamagishi, Hashimoto & Schug, 2008)の研究では、集団主義的な社会、すなわち自分の属する集団から離脱する、あるいは排除されることが致命的な帰結を招くような閉鎖的社会を生きる人々が採用するデフォルトの戦略(適切な戦略を採用することができない、あるいは適切な戦略を採用するにはコストがかかりすぎる場合に採用される戦略)には、集団からの排除につながるエラー(たとえば、他の人たちの感情を損ねてしまうようなエラー)を減らすかたちでバイアスがかけられていることを想定している。鈴木・山岸(2004)が実施した実験室実験の結果は、デフォルトのエラーマネージメント戦略として自己卑下的な自己提示を捉える解釈を支持するものであり、1)日本人の自己卑下的な自己提示は、状況の定義(より具体的には、「総合認知能力テスト」と称するテストでの自身の成績を判断する理由)が不明確な場合のみ観察されること、そして、2)状況の定義が明確になれば(自身の成績を判断する理由が現金のボーナスを得るためであることがはっきりすれば)、自己卑下的な自己提示は観察されなくなることを明らかにしている。鈴木・山岸(2004)の研究では直接的な検証がなされていないが、日本人の自己卑下的自己提示を上述の意味でのエラーマネージメント戦略として捉える際には、自己卑下的な振る舞いをする(あるいはしない)場合に、他者からどのような反応が返ってくるかの予測、ないしその予測を導く文化的信念が重要となり得る。本研究は、この意味での(自分の行動に対する)他者の反応予測に焦点を当て、その予測を生み出す信念の文化差を検討することを目的としている。

方 法

参加者 北海道大学の学生 176 名(男性 115 名, 女性 61 名)¹およびカリフォルニア大学サンタバーバラ校の学生 78 名(男性 34 名, 女性 44 名)に協力を得た。

場面想定法質問紙 鈴木・山岸(2004)が実施した実験状況のシナリオ(総合認知能力テストと称するテストを受けた後、テスト結果を知らされないまま、その成績を尋ねられる)を参加者に提示し、1)この状況で自分の成績について尋ねられたとしたら、同じ大学の学生の成績と比べて「平均より上」だと回答するか、それとも「平均より下」だと回答するかを尋ねた。そして 2)「平均より上」ないし「平均より下」だと回答する人に対する印象と、世間一般の人がそれぞれに対して持つだろう印象をそれぞれ 9 点尺度で尋ねた。

Figure 1. Own personal evaluation and expected impression by others of those who answered either “below average” or “above average” by Japanese and American participants.

Note: -4: have a better impression of those who answered “below average” to +4: have a better impression of those who answered “above average”

結 果

日米において実施された質問紙研究の結果は、まず自己卑下傾向の国籍差(アメリカ人よりも日本人の方が自己卑下)と性差(男性よりも女性の方が自己卑下)を示していた。このことは、橋本・山岸(2008)の結果と一貫する結果である。また、「平均より上」ないし「平均より下」だと回答する人に対して参加者自身が持つ印象と、世間一般の人が持つだろう印象の予測に関する結果は、Figure 1 に示されるとおり、日本人は自己卑下的に振る舞う人に対して、反対にアメリカ人は自己高揚的に振る舞う人に対して肯定的な印象を持っていることを示していた。そして、この傾向は世間一般の人からの印象予測において、より顕著になることも明らかにされた。さらに、補足的に加えていたその他の印象評定項目の結果から、日本人はアメリカ人と比較して、自己卑下的に振る舞う人を“社会的に賢い”と評価していることが示された。

考 察

自己卑下的な自己提示をデフォルトのエラーマネージメント戦略として捉えた場合、エラーマネージメント戦略に見られる文化差(あるいは性差)の背後には、自己卑下的に振る舞わないことによって生じるコスト(すなわち結果の重大さ)の差異、またそのコストに対する信念体系の差異が存在すると考えられる。本研究の結果は、自己卑下的な振る舞いに対する信念体系の文化差が戦略の文化差と対応していることを示唆していた。信念体系の性差に関しては、今後の検討が必要である。

引用文献

- 橋本博文・山岸俊男(2008) 自己卑下的自己提示における性差の検討第 72 回日本心理学会／鈴木直人・山岸俊男(2004) 日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験研究 社会心理学研究, 20, 17-25 / Yamagishi, T., Hashimoto, H., & Schug, J. (2008) Preference vs strategies as explanations for culture-specific behavior *Psychological Science*, 19, 579-584

¹日本人参加者のデータをもとにして得られた結果の一部は、第 72 回日本心理学会において報告されている。